

了賢撰『他師破決集』 訳注（五）——卷第一ノ五——

別 所 弘 淳

はじめに

『他師破決集』の撰者である侍從僧正了賢（一二七九～一三四七）は、『仁和寺諸院家記』（心蓮院本<sup>1</sup>）には、了賢僧正 侍從、毛利時賢子、了遍僧正御附法、東寺・仁和寺・大覚寺等学頭、附法八人と説かれ、また同じく『仁和寺諸院家記』（恵山書写本<sup>2</sup>）には、

了賢僧正 侍從、毛利親宗子、了遍僧正附法、仁和寺・大覚寺等学頭、正安元年十一月十九日、於菩提院道場、対大僧正了遍受灌頂、色衆八口、教授前大僧正禪助、但別座、貞和三年 月 日、入滅

と説かれるように、毛利時賢、あるいは毛利親宗の子<sup>3</sup>であり、正安元年（一二九九）に仁和寺菩提院において了遍（一二三四～一三二一）より灌頂を受け、東寺・仁和寺・大覚寺の学頭となった学匠である。

また、その主著『他師破決集』は、『真言宗全書』解題によれば<sup>4</sup>、他宗の諸学匠（徳一・道詮・珍海・最澄・円珍・安然・兼証・淡海三船等）が東密の教義等に対しておこなった疑難を破するための書であり、三十一の条目で構成されている。卷二の奥書には、「元徳三年正月日、依<sup>二</sup>大覚寺殿仰<sup>一</sup>注<sup>三</sup>進之<sup>一</sup>。法印権大僧都了賢<sup>5</sup>」と記され、また、卷五の奥書には、「正慶元年五月日、依<sup>二</sup>大覚寺殿仰<sup>一</sup>注<sup>三</sup>進之<sup>一</sup>／法印権大僧都了賢<sup>6</sup>」とある通り、元徳三年（一一三三）、正慶元年（一一三三）の頃に「大覚寺殿<sup>7</sup>」の仰せによって撰述されたものである。

『他師破決集』は、先行研究では、主に徳一の『真言宗未決文』に対する反駁書として取り扱われているが、それ以外の諸学匠に対する反駁が扱われた論稿はほとんどなく、または部分的に取り上げられるのみであり、了賢や『他師破決集』自体を扱った研究は全くないといっても過言ではない。

そこで『他師破決集』の全体像を把握することを目的として、訳注を行うこととした。この訳注において用いるのは、「承応二年刊本」を底本、「仁和寺蔵古写本」を対校本とした、『真言宗全書』卷二一  
所収の本である。

凡例

- 一、本稿は、了賢撰『他師破決集』の【原文】に、【訓読】・【典拠】・【解説】を施したものである。
- 二、【原文】は、詳細な【解説】を施すことができるように、条目を更に細かく区切ることにした。尚、【訓読】を表記しているため、【原文】に返り点を付すことはしなかった。
- 三、条目には、『真言宗全書』解題（二二七頁上～二二八頁上）にしたがって通番号を付した。巻第一ノ五に収録される条目は次の通り。
- 四、大日経結集者誰人耶事（後半部）
- 五、【原文】については、いわゆる異体字の類も含め、原則として通行の字体に改めた。また踊り字も元の字体に改めた。中略を示す「○」については【原文】【訓読】ともに「……（中略）……」と表記した。
- 五、【訓読】は、通読の便を考慮し、文意に応じて適宜改行し、段落を設けた。漢字は原則として通行

の字体を用いた。また書名は原則として『』で囲い、引用文も「」で囲った。また割注にはへゝを付した。

六、【典拠】における主要引用文献の略号は以下の通り。

『大正新脩大藏經』↓大正、『弘法大師全集』↓弘全、『大日本仏教全書』↓仏全

『真言宗全書』↓真全、鈴木版『日本大藏經』↓日藏

七、【解説】は、関連する事柄について言及しながらも、できる限り現代語訳することに努めた。

### 訳注研究

#### 【原文】

大日経開題云、問。何人如是指語。答。有三積。初てきれよ之詞也。次きてやい親之指言也。三てれ爾有、無人増減。てりたよ者、金剛薩埵積云、離伝聞出工言。我金剛薩埵、親従大日尊聞也<sup>文</sup>。

【訓読】

『大日経開題』に云く、「問う。何かなる人の「如是」と指す語ぞや。答う。三積あり。初にはバザラサトバの詞なり。次にはベイロシヤノウの親りの指す言なり。三にはタラマ爾（法爾）の有にして、人の増減すること無し。マヤシユロタとは、金剛薩埵の積に云く、「伝聞を離れ工言を出でたり。我れ金剛薩埵、親り大日尊に従つて聞くなり」と文り。

【典故】

- (1) 『大日経開題』…空海（七七四～八三五）『大日経開題』（弘全一・六六三頁）。
- (2) 金剛薩埵の積…詳細不明。

【解説】

これより以下は、本条目「大日経結集者誰人耶事」作成の際に参照したとされる経典・論書等の引用文を集めたものである（便宜上、資料編とする）。したがって、了賢自らが紡いだ文はない（本条目の議論については、前号〈川崎大師教学研究紀要〉第六号・二〇二二）所収の拙論「了賢撰『他師破決集』訳注（四）—巻第一ノ四—」を参照されたい。

了賢は、この資料編において、計十二の引用文を引いている。十二の引用文の出典を示せば、以下の

ようになる。

- |            |          |          |           |
|------------|----------|----------|-----------|
| ① 『大日経開題』  | ② 『秘蔵記』  | ③ 『大乘義章』 | ④ 『教時間答』  |
| ⑤ 『仁王般若経疏』 | ⑥ 『教時間答』 | ⑦ 『仏心経』  | ⑧ 『教時間答』  |
| ⑨ 『大日経疏鈔』  | ⑩ 『教時間答』 | ⑪ 『教時間答』 | ⑫ 『曼荼羅問答』 |

はじめに、空海『大日経開題』の文を挙げている。この『大日経開題』では、『大日経』の「如是」とは誰が言った言葉なのかとの質問に対し、三釈あることを提示している。第一は金剛薩埵 (vajrasattva)、第二は大日如来 (vairocana) 自身、第三は法 (dharma) 爾そのものである。また、「我聞」(mayā srutam) について、金剛薩埵の釈(詳細不明)として、「人から伝え聞いたものでも、言葉を作り出したのでもなく、私(金剛薩埵)が直接大日如来に従って聞いたのである」としている。

したがって、この『大日経開題』の文は、『大日経』の結集者(「我」)が誰なのかという本条目の議論について、阿難(問者の見解)、金剛薩埵(答者の見解)の両説があるうち、答者側の典拠とすることができる。

【原文】

秘藏記云、結集。修多羅阿難、毘那耶藏優婆離、阿卑達摩迦旃延、般若文殊、秘密普賢、是守護国界経所説。又顯教中説云、仏滅度後、普賢・文殊菩薩、率阿難於鉄圍間結集諸経。是則総。守護国界経所説別也耳文。

【訓読】

『秘藏記』<sup>(1)</sup>に云く、「結集。修多羅（阿難）、毘那耶藏（優婆離）、阿卑達摩（迦旃延）、般若（文殊）、秘密（普賢）、是れ『守護国界経』の所説なり。又顯教の中に説いて云く、「仏滅度の後、普賢・文殊菩薩、阿難を率いて鉄圍の間に於て諸経を結集せしむ」と。是れは則ち総なり。『守護国界経』の所説は別なるのみ」と文り。

【典拠】

(1) 『秘藏記』：伝空海『秘藏記』（弘全二・四一頁）。

(2) 『守護国界経』：『守護国界経』とあるが、実際には『大乘理趣六波羅蜜多経』卷一（大正八・八六八頁下）に、「復次慈氏我滅度後、令下阿難陀受持所説素咀纜藏<sup>1</sup>、其鄢波離受持所説毘奈耶藏<sup>2</sup>。迦多衍那受持所説阿毘達磨藏<sup>3</sup>、曼殊室利菩薩受持所説大乘般若波羅蜜多<sup>4</sup>。其金剛手菩薩受中持所説甚深微妙諸総持門上」とあることに基ついた解釈であることが報告されている（勝又俊教編『弘法大師著作全集』卷二、山喜房仏書林・一九七〇、等）。

(3) 顕教の中…次の【原文】に示した『大乘義章』卷一（大正四四・四六六頁下、四六九頁中に同文あり）を指すか。

【解説】

資料編の第二の文は『秘藏記』である。ここでは、顕教の説を「総」、『守護国界経』の説を「別」とした、総・別の二説が示されている。総の見解（顕教）では阿難、別の見解（『守護経』…密教）では普賢（金剛薩埵）が結集者であるとされる。

なお、注記した通り、『守護国界経』とあるものの、この見解は『六波羅蜜多経』に基づいたものであるとされる。

【原文】

大乘義章第一二云、竜樹亦云、迦葉・阿難、於王舎城結集三藏為声聞藏、文殊・阿難、於鉄围山集摩訶衍為菩薩藏文。

【訓読】

『大乘義章』<sup>1</sup>第一に云く、「竜樹亦た云く、迦葉・阿難、王舎城に於て三藏を結集して声聞藏と為し、文殊・

阿難、鉄冨山に於て摩訶衍を集めて菩薩蔵と為す」と文り。

【典拠】

（1）『大乘義章』…慧遠『大乘義章』卷一（大正四四・四六六頁下、四六九頁中に同文あり）。なお、「竜樹云」とある通り、この文は『大智度論』卷一〇〇（大正二五・七五六頁中）に、「復次有人言、如<sub>二</sub>摩訶迦葉、將<sub>二</sub>諸比丘<sub>一</sub>在<sub>二</sub>耆闍崛山中<sub>一</sub>集<sub>三</sub>蔵」。仏滅度後、文殊尸利・弥勒諸大菩薩、亦將<sub>二</sub>阿難<sub>一</sub>集<sub>二</sub>是摩訶衍<sub>一</sub>」とあることに基ついたものと考えられる。

【解説】

資料編の第三の文は『大乘義章』である。ここでは、竜樹の説（『大智度論』か）として、迦葉・阿難が三蔵を集めて声聞蔵とし、文殊・阿難が大乘を集めて菩薩蔵としたことが示されている。この文は『大日経』を大乘經典と見做して阿難を結集者とする典拠ともいえるが、一方で、密教經典の結集についての言及がないため、阿難の結集を否定する典拠とも捉えることができる。

【原文】

又云、問。若約阿難有幾種耶。答。金剛頂疏云、正法念経明三阿難。阿難、此云歡喜。持小乘蔵。阿難

跋陀、此云歡喜賢。持雜藏。阿難婆伽、此云歡喜海。持仏藏。阿含經云、有典藏阿難、持菩薩藏。蓋指一人具四德考。集法伝云、有三阿難。一阿難。此云慶喜、持声聞藏。二阿難跋陀。此云喜賢、持独覺藏。三阿難伽羅。此云喜海、持菩薩藏。三名雖異、但一人矣。金剛仙論・闍王懺悔經亦不異此經云云。

### 【訓読】

又(1)云く、「問う。若し阿難に約せば幾種有るや。答う。『金剛頂疏』に云く、『正法念經』に三阿難を明かす。阿難、此れに歡喜と云う。小乘藏を持す。阿難跋陀、此れに歡喜賢と云う。雜藏を持す。阿難婆伽、此れに歡喜海と云う。仏藏を持す。『阿含經』に云く、典藏阿難有り、菩薩藏を持すと。蓋し一人の四徳を具するを指す矣。『集法伝』に云く、三阿難有り。一には阿難。此れを慶喜と云い、声聞藏を持す。二には阿難跋陀。此れを喜賢と云い、独覺藏を持す。三には阿難伽羅。此れを喜海と云い、菩薩藏を持す。三名異なりと雖も、但一人のみ矣。『金剛仙論』『闍王懺悔經』も亦た此の經に異ならず云云」と。

### 【典拠】

- (1) 又云く…安然(八四一〜八八九)、一説九一五没『教時問答』卷二(大正七五・四〇八頁上〜中)。
- (2) 『金剛頂疏』…円仁(七九四〜八六四)『金剛頂經疏』卷一(大正六一・二二頁上)。
- (3) 『正法念經』・『正法念處經』(大正一七・七二番)や、『正法念經』と称される『仏説分別善惡所起經』

（大正二七・七二九番）に、「三蔵の阿難」の記述は見られない。これは、智顛『法華文句』卷一上（大正三四・四頁上）に、「正法念經明三阿難」。阿難陀、此云「歡喜」。持「小乘蔵」。阿難跋陀、此云「歡喜賢」。受「持雜蔵」。阿難娑伽、此云「歡喜海」。持「仏蔵」とあることの孫引きと考えられる。ここでは、『正法念經』の説として、小乘蔵（阿難陀）・雜蔵（阿難跋陀）・仏蔵（阿難娑伽）の三蔵の阿難が示されている。

（4）『阿含經』…『阿含經』…前注と同様、智顛『法華文句』卷一上（大正三四・四頁上）に「阿含經有「典蔵阿難」、持「菩薩蔵」とあることの孫引きと考えられる。

（5）『集法伝』…詳細不明。この『集法伝』の引文は、良賁『仁王護国般若波羅蜜多經疏』卷上一（大正三三・四三七頁上）、基『妙法蓮華經玄贊』卷一末（大正三四・六六三頁中）、澄觀『大方広仏華嚴經隨疏演義鈔』卷一五（大正三六・一一〇頁上）などにも見ることができる。なお、田島德音訳『真言宗教時義』（『国訳一切経』諸宗部一八・九九頁）では、この『集法伝』について、「散逸して存せず」と注記している。

（6）『金剛仙論』…『金剛仙論』卷一（大正二五・八〇〇頁下）に、「三種阿難大・小・中乗、伝「持三乘法蔵」とあることを指す。

（7）『閻王懺悔經』…詳細不明。

【解説】

資料編の第四の文。「又云く」とあるが、『大乘義章』ではなく、『安然』教時間答の文である。この文では、阿難に何種あるのかとの質問に対し、円仁『金剛頂経疏』をもつて回答としている。『金剛頂経疏』では、『正法念経』『阿含経』『集法伝』（詳細不明）の説を以下のように提示している。

- ・『正法念経』…①阿難（歡喜…小乘）、②阿難跋陀（歡喜賢…雜藏）、③阿難婆伽（歡喜海…仏藏）
- ・『阿含経』…典藏阿難（菩薩藏）
- ・『集法伝』…①阿難（慶喜…声聞藏）、②阿難跋陀（喜賢…独覺藏）、③阿難伽羅（喜海…菩薩藏）（名は異なるもただ一人とする）

そして、『集法伝』の説と『金剛仙論』・『閻王懺悔経』（詳細不明）の説が異ならないとしている。

【原文】

嘉祥仁王経疏云、若依金剛仙論、明三種阿難。一大乘阿難。即阿難海。持大乘法藏。二中乘阿難。即阿難陀婆羅。持中乘法藏。三小乘阿難。阿難賢。持小乘法藏矣。

【訓読】

嘉祥<sup>①</sup>の『仁王経疏』に云く、若し『金剛仙論』<sup>②</sup>に依らば、三種の阿難を明かす。一には大乘阿難。即

ち阿難海なり。大乘法蔵を持す。二には中乗阿難。即ち阿難陀婆羅なり。中乘法蔵を持す。三には小乗阿難。阿難賢なり。小乘法蔵を持す矣。

【典拠】

- (1) 嘉祥の『仁王経疏』…吉蔵『仁王般若経疏』卷上一（大正三三・三一六頁下）。  
(2) 『金剛仙論』『金剛仙論』卷一（大正二五・八〇頁下）に、「三種阿難大・小・中乗、伝持三乘法蔵」とあることを指すか。ただし、『金剛仙論』に、「阿難海・阿難陀婆羅・阿難賢」の記述はみられない。

【解説】

資料編の第五の文は『仁王般若経疏』である。この文では、『金剛仙論』の説として、①大乘阿難（阿難海）、②中乗阿難（阿難陀婆羅）、③小乗阿難（阿難賢）の三種の阿難が、それぞれ、大乘、中乗（縁覚乗）、小乗（声聞乗）の法蔵を持する（結集）したことが示されている。ただし、【典拠】に示した通り、『金剛仙論』には「阿難海・阿難陀婆羅・阿難賢」の記述はみられない。

【原文】

教時義二云、問。若約顕教、応云総聞。若於秘教何立此義。答。金剛頂疏答此問云、涅槃経云、阿難具

足八種不可思議。其第八云悉能了知仏秘密法。若爾、阿難亦知秘教<sup>文</sup>。

【訓読】

『教時義』二に云く、「問う。若し顯教に約せば、応に総じて聞くと云うべし。若し秘教に於て何ぞ此の義を立つるや。答う。『金剛頂疏』に此の問に答えて云く、『涅槃經』に云く、阿難は八種の不可思議を具足す。其の第八を悉能了知仏秘密法と云う。若し爾らば、阿難は亦た秘教を知る」と文り。

【典拠】

(1) 『教時義』…安然『教時問答』卷二(大正七五・四〇八頁上)。

(2) 総じて聞く…前注1の安然『教時問答』卷二(大正七五・四〇八頁上)の直前に「総聞、唯在<sup>二</sup>侍者阿難<sup>一</sup>とあることを指す。すなわち、阿難が仏の説を総じて聞いたということ。

(3) 此の義…前注1の前に、円仁『金剛頂經疏』からの引用として「於<sup>二</sup>六波羅蜜經中<sup>一</sup>收<sup>二</sup>撰法宝<sup>一</sup>、以爲<sup>二</sup>五分<sup>一</sup>。一素怛纁、二毘奈耶、三阿毘達摩、四般若波羅蜜、五陀羅尼門。而拳<sup>二</sup>五人<sup>一</sup>、以爲<sup>二</sup>滅後傳教者<sup>一</sup>。謂阿難、鄒婆離、迦多衍那、曼殊師利、金剛手、如<sup>レ</sup>次令<sup>三</sup>各受<sup>二</sup>持<sup>一</sup>一藏<sup>一</sup>。若依<sup>二</sup>此義<sup>一</sup>、応<sup>レ</sup>云<sup>二</sup>金剛手之我聞<sup>一</sup>也<sup>一</sup>」(大正七五・四〇七頁下〜四〇八頁上)とあることを指す。すなわち、陀羅尼門(密教)の結集者が金剛手であるということ。

(4) 『金剛頂疏』… 円仁 『金剛頂経疏』 卷一（大正六一・三頁上〜中）に、「涅槃経中、仏告文殊、阿難事<sub>レ</sub>仏二十年、具足八種不可思議」。一、不<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>別請<sub>一</sub>。二、不<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>故衣<sub>一</sub>。三、不<sub>二</sub>非時見<sub>レ</sub>仏。四、見<sub>二</sub>一切女人<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>欲心<sub>一</sub>。五、持<sub>二</sub>一切法<sub>一</sub>不<sub>二</sub>會再問<sub>一</sub>。唯除<sub>レ</sub>問<sub>下</sub>於<sub>二</sub>釈種<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>殺。六、知<sub>二</sub>仏所<sub>一</sub>入<sub>二</sub>定<sub>一</sub>。七、知<sub>下</sub>至<sub>二</sub>仏所<sub>一</sub>者受益不<sub>レ</sub>同。八、悉能<sub>レ</sub>了<sub>二</sub>知<sub>二</sub>仏秘密法<sub>一</sub>。若爾者、応<sub>レ</sub>云<sub>二</sub>阿難亦知<sub>二</sub>秘教<sub>一</sub>也」とあることを指す。

(5) 『涅槃経』… 慧嚴訳 『大般涅槃経』（南本）卷三六（大正二・八四九頁下〜八五〇頁上）に、「文殊師利、阿難事<sub>レ</sub>我二十餘年、具足八種不可思議。何等為<sub>レ</sub>八。一者事<sub>レ</sub>我已來二十餘年、初不<sub>レ</sub>我受<sub>二</sub>別請食<sub>一</sub>。二者事<sub>レ</sub>我已來、初不<sub>レ</sub>受<sub>二</sub>我陳故衣服<sub>一</sub>。三者自<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>我來、至<sub>二</sub>我所<sub>一</sub>時、終不<sub>二</sub>非時<sub>一</sub>。四者自<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>我來、具足煩惱、隨<sub>二</sub>我入<sub>二</sub>出諸王・刹利・豪貴・大姓<sub>一</sub>、見<sub>二</sub>諸女人及天童女<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>欲心<sub>一</sub>。五者自<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>我來、持<sub>二</sub>我所說十二部經<sub>一</sub>、一經<sub>二</sub>於耳<sub>一</sub>會不<sub>二</sub>再問<sub>一</sub>。如下<sub>二</sub>写<sub>二</sub>瓶水<sub>一</sub>置<sub>中</sub>之一瓶<sub>上</sub>。唯除<sub>二</sub>一問<sub>一</sub>。……（中略）……六者自<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>我來、雖<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>獲<sub>二</sub>得知他心智<sub>一</sub>、常知<sub>二</sub>如來所入諸定<sub>一</sub>。七者自<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>我來、未<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>願智<sub>一</sub>、而能<sub>下</sub>了<sub>二</sub>知<sub>二</sub>如來衆生到<sub>二</sub>如來所<sub>一</sub>、現在能得<sub>二</sub>四沙門果<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>後得者<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>人身<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>天身<sub>一</sub>。八者自<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>我來、如來所有秘密之言悉能<sub>レ</sub>了<sub>二</sub>知<sub>一</sub>。善男子、阿難比丘具足如<sub>レ</sub>是八不思議。是故、我称<sub>二</sub>阿難比丘<sub>一</sub>為<sub>二</sub>多聞藏<sub>一</sub>」として八種の不可思議を出だす中の八番目に、「如來の所有秘密の言を悉く能く了知す」として、秘密を了知する徳を挙げてゐる。

【解説】

資料編の第六の文は安然『教時間答』である。この文では、顕教には阿難が仏の法を総じて聞いたこととなっているのに、なぜ密教の結集者は金剛手なのかという質問に対し、円仁『金剛頂経疏』を引いて回答している。『金剛頂経疏』には、『涅槃経』に、阿難が八種の不可思議を具足し、その八番目が「悉く能く仏の秘密法を了知すること」であると説かれることから、阿難も秘教（密教）を仏から説かれていたと示されている。

【原文】

仏心経下云、爾時阿難、処大衆中慳然憂愁。於其中間諸有経律一切法蔵、俱然掩閉。……（中略）……  
爾時毘盧遮那如来、復於身分更開異色、無量威徳大端嚴光。……（中略）……告諸仏言、諸大聖衆、此光難知、此威光難測。唯有大聖与我力等、……（中略）……  
爾時阿難、於其悶中、心有少省。強自意持、即問盧遮那言、世尊、其此光者唯説諸仏耶。  
仏言、善男子、唯仏能知。雖有菩薩、未同仏見。……（中略）……  
阿難、白仏言、世尊、如是菩薩猶故不知。一切衆生、云何得解此理。仏言、汝我法親承第七釈迦牟尼。次当宣説。一切衆生、自然得了。……（中略）……

爾時阿難、即問釈迦牟尼言、世尊、此事云何。……（中略）……

爾時如來、告阿難言、我今示現如是神力。汝等、遞相告語、慎勿驚怖。……（中略）……

此通光遍十方界有大威德三明六通、具八解脫。如法修者直至仏身、更無異身。何以故。諸仏心同時証故。諸如來同印可故。我盧遮那者是仏母。常於此中自住持故。所有願求自印可故。……（中略）……等文。

【訓読】

※内容理解の頼りとするため、【原文】の中略部を『大正新脩大藏經』により補った箇所がある。補った箇所はゴシック体で表記した。

『仏心經』<sup>①</sup>下に云く、「爾時阿難、大衆中に処して憺然として憂愁す。其の中間に於て諸有の經・律の一切法蔵、俱に然も掩閉す。……（中略）……」

爾時毘盧遮那如來、復た身分に於て更に異色を開き、無量威徳大端嚴光あり。其の光普く照らし、乃ち有罪・無罪等に至る。是の如き衆生は皆な無怖を得。復た光中に於て演説し微細の音声あり。諸仏に告げて言く、諸大聖衆、此の光は知り難く、此の威光は測り難し。唯だ大聖のみ有りて我が力と等しく、我が心と等しく、我が慈と等しく、我が悲と等しく、我が解と等しく、我が知と等しく、我が弁と等しく、乃し世界所有の知量に至るまで、能く尽く知る者は、即ち能く此の光明を知る。所謂る因縁にして種種の知見を得るなり。

爾時阿難、其の悶中に於て、心に少省有り。強き自意をもて持して、即ち盧遮那に問うて言く、世尊、其れ此の光は唯だ諸仏にのみ説かんや。

仏の言く、善男子、唯だ仏のみ能く知る。菩薩有りと雖も、未だ仏の見到じからず。

其の時阿難、前んで仏足を礼し、五体投地して眼中に涙を垂れ、偈を以て問うて曰く、

世界に菩薩有り、現身に仏と為ることを得。世界に菩薩有り、能く無辺の身に化す。……(中略)

……云何が此の人等、此の因縁を知らざるや。若し此れ知らざる者ならば、下愚は何ぞ能くせん。

爾時毘盧遮那仏、光明の中に於て大音声を出だし、阿難を歎じて言く、善哉、仏子、是れ等の菩薩は大慈有りと雖も慈遍からざるを以ての故に。所以に知らず。大悲有りと雖も悲遍からざるが故に。所以に知らず。……(中略)……是の如く遍からざる一一の菩薩に皆な悉く之れ有り。若し遍くことを得れば、仏性を了見す。即ち能く我を知る。此の事、仏性は猶お故より未だ了せず。云何が能く知らんとなれば、如来の量処なればなり。

阿難、仏に白して言く、世尊、是の如き菩薩は猶お故より知らず。一切衆生、云何が此の理を解することを得んや。仏の言く、汝は我が法を親り第七の釈迦牟尼に承く。次に當に宣説すべし。一切衆生、自然に了することを得ん。能く奉持する者は、一切衆生、自然に我が所説を解することを得ん。

爾時阿難、即ち釈迦牟尼に問うて言く、世尊、此の事云何ん。……(中略)……

爾時如来、阿難に告げて言く、我れ今是の如き神力を示現す。汝等、遞に相い告げて語りて、慎んで驚怖すること勿れ。阿難、即ち如来の語を受けて大衆に告げて言く、大衆當に知るべし、大衆當に知るべしと、高声に三たび告ぐ。其の時阿難、身の騰るを覺えずして虚空中に処し、大衆仰ぎ觀て、阿難の

身を見て謂く、是の阿難は無礙通を得たり。其の時音声遍く阿迦尼吒天に至り、所有世界、尽く皆な知聞す。阿難、仏に白して言く、世尊に遍く告げ已訖りて、唯だ示現を願う。……（中略）……

仏、諸善男子に告ぐ。此の通光は十方界に遍じて大威徳・三明・六通有り、八解脱を具す。如法に修する者は直に仏身に至り、更に異身無し。何を以ての故に。諸仏の心は同時証なるが故に。諸如来は同印可なるが故に。我が盧遮那は是れ仏母なり。常に此の中に於て自ら住持するが故に。所有の願求は自ら印可するが故に。……（中略）……」等と文り。

【典拠】

(1) 『仏心経』：『仏心経』巻下（大正一九・八頁下～九頁下～四〇八頁上）。

【解説】

資料編の第七の文は『仏心経』である。この文には、阿難と毘盧遮那との問答が示されている。すなわち、毘盧遮那の音声を阿難は聞くことができたため、密教の結集者が阿難であることの典拠として示されていると考えられるが、一方、この文では、毘盧遮那は光明より大音声を発しているため、阿難は毘盧遮那の音声のみを聞き、姿を見ることはできていない。毘盧遮那の「汝は我が法を親り第七の釈迦牟尼に承く」という音声の通り、阿難は毘盧遮那の法を釈迦牟尼より受けている。したがって、阿難は

釈迦牟尼の結集者であつて密教の結集者ではないとする典拠にもなりうると思えられる。

### 【原文】

教時義二云、問。伝法菩薩誰耶。答。若約結集主是金剛手。若約結集伴者亦通阿難也。問。何以知之。答。金剛頂疏云、仏、於六波羅蜜經中收摂法宝、以為五分。一素怛覽、二毘奈耶、三阿毘達摩、四般若波羅蜜、五陀羅尼門。而挙五人、以為滅後傳教者。謂阿難、鄒波離、迦多衍那、曼殊室利、金剛手、如次令各受持一藏。若依此義、応云金剛手之我聞也。若依結集伴者、義、通阿難。故智論云、以滅度後、文殊師利、弥勒諸大菩薩、亦將阿難集此摩訶衍。故義通<sup>文</sup>。

### 【訓読】

『教時義』一に云く、「問う。伝法の菩薩とは誰ぞや。答う。若し結集の主に約せば是れ金剛手なり。若し結集の伴に約せば亦た阿難に通ずるなり。問う。何を以て之れを知る。答う。『金剛頂疏』に云く、仏、<sup>③</sup>『六波羅蜜經』の中に於て法宝を收摂し、以て五分と為す。一には素怛覽、二には毘奈耶、三には阿毘達摩、四には般若波羅蜜、五には陀羅尼門なり。而して五人を挙げて、以て滅後の傳教者と為す。謂く阿難、鄒波離、迦多衍那、曼殊室利、金剛手、次いで之の如く各の一藏を受持せしむ。若し此の義に依らば、<sup>④</sup>応に金剛手の我聞なりと云うべきなり。若し結集の伴に依らば、義、阿難に通ず。故に『智論』に云く、

滅度の後を以て、文殊師利・弥勒の諸大菩薩、亦た阿難を將て此の摩訶衍を集む。故に義通ず」と文り。

【典拠】

(1) 『教時義』…安然『教時問答』卷一（大正七五・四〇七頁下〜四〇八頁上）。

(2) 『金剛頂疏』…円仁『金剛頂経疏』卷一（大正六一・二二頁下）。

(3) 『六波羅蜜経』…『大乘理趣六波羅蜜多経』卷一（大正八・八六八頁下）に、「復次慈氏我滅度後、令下阿難陀受<sub>二</sub>持所<sub>レ</sub>説素咀纒藏<sub>一</sub>、其鄔波離受<sub>二</sub>持所<sub>レ</sub>説毘奈耶藏<sub>一</sub>。迦多衍那受<sub>二</sub>持所<sub>レ</sub>説阿毘達磨藏<sub>一</sub>、曼殊室利菩薩受<sub>二</sub>持所<sub>レ</sub>説大乘般若波羅蜜多<sub>一</sub>。其金剛手菩薩受<sub>中</sub>持所<sub>レ</sub>説甚深微妙諸総持門<sub>上</sub>とあなることを指す。

(4) 『智論』…『大智度論』卷一〇〇（大正二五・七五六頁中）。

【解説】

資料編の第八の文は安然『教時問答』である。この文では、伝法の菩薩（密教における結集者）が誰であるのかとの問いに対し、結集者には主伴の観点があると回答する。密教においては金剛手が主、阿難は伴である。この根拠として、円仁『金剛頂経疏』に示される『六波羅蜜経』の解釈、すなわち、結集者を主の観点で見るとすれば、素恒覧は阿難、毘奈耶は鄔波離、阿毘達摩は迦多衍那、般若波羅蜜は曼殊

室利、陀羅尼門は金剛手がそれぞれ結集者であるとする。ただし、結集者を伴の観点よりみれば、これらすべてが阿難に通ずるとする。この根拠として、『大智度論』に、文殊・弥勒が、阿難をもちいて大乘を集めたとの記述を引き、大乘の結集に文殊・弥勒のみならず、阿難が含まれていることを示している。

### 【原文】

智証疏鈔云、如是我聞者、約已開門為阿難我。若爾、阿難非大日侍者。何称我聞。阿闍梨云、約法界通開義無其妨難文。

### 【訓読】

智証の『疏鈔』に云く、「如是我聞とは、已開門に約せば阿難の我と為す。若し爾らば、阿難は大日の侍者に非ず。何ぞ我聞と称せん。阿闍梨の云く、法界通開の義に約せば其の妨難無し」と文り。

### 【典拠】

(1) 智証の『疏鈔』…円珍(八一四～八九二)『大日経疏鈔』(仏全三六・六七六頁上～下)。

### 【解説】

資料編の第九の文は円珍『大日経疏鈔』である。この文では、阿難は大日如來の侍者ではないため、『大日経』の「如是我聞」の「我」は阿難ではないのではないかとの質問に対し、阿闍梨（詳細不明）の説として、法界があらゆるところに通じていて開かれているという観点より述べれば、密教も阿難の結集といつても妨げないと回答している。

【原文】

教時義二云、問。探経首尾、但列菩薩不涉声聞。何通阿難。答。疏答此問云、経在極略而列菩薩不多。何況声聞。於海会中有声聞衆。阿難何独無。故金剛頂云、其金剛阿闍梨、応思惟外壇中舍利弗等無量比丘来詣者云云。又大日経云、東方初門中画釈迦牟尼・声聞・縁覚衆等云云。又天竺曼荼羅列阿難等一切声聞及旃檀香等縁覚衆也。故知。阿難亦従大日如來総聞秘教文。

【訓読】

『教時義』二に云く、「問う。経の首尾を探るに、但だ菩薩のみを列して声聞に涉らず。何ぞ阿難に通ぜん。答う。『疏』に此の問に答えて云く、経は極略に在りて菩薩を列すること多からず。何に況んや声聞をや。海会中に於て声聞衆有り。阿難の何ぞ独り無からん。故に『金剛頂』に云く、其の金剛阿闍梨、応に外壇の中に舍利弗等の無量の比丘の来詣者を思惟すべしと云云。又『大日経』に云く、東方の初門の中に釈

迦牟尼・声聞・縁覚衆等を描けと云々。又天竺の曼荼羅に阿難等の一切声聞及び旃檀香等の縁覚衆を列するなり。故に知んぬ。阿難も亦た大日如来より総じて秘教を聞くことを」と文り。

【典拠】

(1) 『教時義』・安然『教時問答』卷二(大正七五・四〇八頁上)。

(2) 『疏』・円仁『金剛頂経疏』卷一(大正六一・二二頁中)。

(3) 『金剛頂』・『金剛頂瑜伽中略出念誦経』卷三(大正一八・二四一頁上)に「其金剛阿闍梨、応<sub>下</sub>思<sub>二</sub>惟<sub>一</sub>是等及餘<sub>一</sub>、置<sub>中</sub>外壇<sub>中上</sub>。毘盧遮那等諸天、止<sub>二</sub>住欲界<sub>一</sub>者、意樂<sub>三</sub>調<sub>二</sub>伏煩惱<sub>一</sub>者、及舍利弗等無量諸比丘來詣者、皆思<sub>二</sub>惟之<sub>一</sub>」とあることを指す。

(4) 『大日経』・『大日経』卷一(大正一八・七頁中)に、「東方初門中 画<sub>二</sub>釈迦牟尼<sub>一</sub>」とあるものの、声聞・縁覚を曼荼羅に画くことは説かれていない。法全『大毘盧遮那成仏神変加持経蓮華胎藏悲生曼荼羅広大成就儀軌供養方便会』卷二(大正一八・二〇頁中)、いわゆる『玄法寺儀軌』には、「持真言行者、次往<sub>二</sub>第三院<sub>一</sub>。東方初門中、釈迦師子壇。……(中略)……梅檀香辟支、多摩羅香等、目連・須菩提、迦葉・舍利弗、如来并喜・捨、傘上如来牙、輪輻・辟支仏、宝輻辟支仏、拘絺羅・阿難、迦旃・憂波離、智・供養雲海」とあるように、釈迦とともに声聞・縁覚が画かれている。同じく法全『大毘盧遮那成仏神変加持経蓮華胎藏菩提幢標幟普通真言藏広大成就瑜伽』卷下(大

正一八・一五八頁下（一五九頁上）、いわゆる『青龍寺儀軌』にも同文がみられる。したがって『大日經』とあるものの、あるいは『玄法寺儀軌』や『青龍寺儀軌』を指すか。

【解説】

資料編の第十の文は安然『教時間答』である。この文では、『大日經』には菩薩のみが列され声聞の記載がないにもかかわらず、なぜ結集者を阿難とすることができるとの質問に対し、『金剛頂經疏』の記述によつて回答している。『金剛頂經疏』には、經は極めて略されたものであるため、菩薩の名ですら省略されることが間々ある。したがって、声聞衆も略されているだけであり、実には存しているとする。この根拠として、『略出念誦經』に曼荼羅の外壇に舍利弗等を思惟せよとの記述があること、また『大日經』（『玄法寺儀軌』或いは『青龍寺儀軌』か）に、曼荼羅東方の初門に釈迦・声聞・縁覺衆を画けと説かれていることを示している。これらの記述により、阿難も大日如来の説会に列して密教を聞いていたとしている。

【原文】

又云、若約大悲胎藏曼荼羅義、四重海会皆是遍法界身。金剛界身。故以遍法界阿難之耳、普聞遍法界大日之説。例如釈迦託摩耶胎、胎如法界、一切法身・菩薩集會、猶雲籠月、託胎出胎。

【訓読】

又云く、「若し大悲胎藏曼荼羅の義に約せば、四重海会は皆な是れ遍法界身なり。金剛界身なり。故に法界に遍する阿難の耳を以て、普く法界に遍する大日の説を聞く。例えば釈迦の摩耶の胎に託せしとき、胎は法界の如くにして、一切の法身・菩薩集会すること、猶おし雲の月を籠りたるがごとく、託胎出胎するが如し」と。

【典故】

(1) 又云く…安然『教時問答』卷二(大正七五・四〇八頁中)。

【解説】

資料編の第十一の文は安然『教時問答』である。この文では、大悲胎藏曼荼羅(『教時問答』本文では「大悲蔵曼荼羅」)の観点からすれば、四重の曼荼羅に画かれた諸尊は遍法界身、金剛界身であるため、そこに画かれた阿難も法界に遍満している。その法界に遍満する阿難の耳で、同じく法界に遍する大日如来の説法を聞くのであるから、大日如来の結集者が阿難であることに問題はないと主張している。また、この説の例として、釈尊の入胎・出胎を挙げている。

【原文】

智証釈云、於法界宮說大日經、唯有菩薩無声聞衆。誰人聞持結集流伝人間耶。

答。猶如常、說阿難開持文殊結集。

諮問。若爾、經中只列金剛手及菩薩衆、不列声聞一人。何因名為阿難聞持耶。

答。經文略举上首故云、十仏微塵數衆。明知、阿難在中列。

又諮。十仏微塵數衆者、只是普賢・執金剛等眷属非声聞衆。

答。曼荼羅中阿難有之。故知、可在也。

又諮。如來從本垂迹三重曼荼羅、隨機、隨時示現加具。然則阿難在第二重釈迦眷属之中。何由聞持大日所說。

答。所言從初重現第二重院、從第二重現第三重者、此只言說次第也。但於実義、三重一時靡不具足。凡

此曼荼羅衆、内能知外、外能知内。彼此融通知見平等。加以、阿難至此教時、悟与大菩薩齊。相能堪聞

持也云云

【訓読】

智証〔の釈に云く、「法界宮に於て『大日經』を説くに、唯だ菩薩のみ有りて声聞衆無し。誰人か聞持し結集して人間に流伝するや。〕

答う。猶お常の如く、阿難聞持し文殊結集すと説く。

諮問す。若し爾らば、經中に只だ金剛手及び菩薩衆を列し、声聞一人をも列せず。何に因て名けて阿難の聞持とやせん。

答う。經文は略して上首を挙ぐるが故に、「十(2)仏微塵數衆」と云う。明らかに知んぬ、阿難は中に在りて列することを。

又諮る。十仏微塵數衆とは、只だ是れ普賢・執金剛等の眷属にして声聞衆に非ず。

答う。曼荼羅の中に阿難之れ有り。故に知んぬ、在るべきなり。

又諮る。如来従本垂迹の三重曼荼羅、機に随い、時に随いて示現して加具せり。然れば則ち阿難は第二重釈迦眷属の中に在り。何に由てか大日の所説を聞持せん。

答う。言う所の「初(3)重より第二重院を現じ、第二重より第三重を現ず」とは、此れ只だ言説の次第なり。但だ実義に於ては、三重一時に具足せざること靡なし。凡そ此の曼荼羅衆は、内は能く外を知り、外は能く内を知る。彼此融通して知見平等なり。しかのみならず加以、阿難の此の教に至る時、悟り大菩薩と齊しきなり。相い能く聞持するに堪えたるなり」と三云

### 【典拠】

(1) 智証の釈：『曼荼羅問答』（日藏七九・三六頁上・下）。ただし、本書標題の下には「慈覺大師問敷向法全

和尚等答」（日藏七九・二二六頁上）とあるため、円珍（智証大師）ではなく円仁（慈覚大師）であろうか。木内堯史氏は、本書解題（日藏九九・三一頁上～下）において、円仁の門人が問い、円仁が答えたものではないかと推論している。ただし、対校本の一つの奥書（日藏七九・三三四頁上）には、「山王院智証大師在唐時記不可穴可秘之／于時元亨三年三月六日於甲州横眼寺書之／仏子能信」とあることから、あるいは了賢は、この対校本系統の本を用いたとも考えられる。

なお、この『曼荼羅問答』の文は、杲宝『宝冊鈔』巻一〇（大正七七・八三三頁上）にも引かれているが、「曼荼羅問答<sup>禁聲</sup>二云」とあるように、円仁のものとして扱われている。

- (2) 十仏微塵数衆…『大日経』巻一（大正一八・二頁上）に「如是我聞。一時薄伽梵、住如来加持広大金剛法界宮、一切持金剛者、皆悉集会。如来信解遊戲神變生大樓閣宝王、高無中辺、諸大妙宝王、種種間飾、菩薩之身為師子座。其金剛名曰虚空無垢執金剛、……（中略）……金剛手秘密主。如<sup>レ</sup>是上首、十仏刹微塵数等持金剛衆俱。及普賢菩薩、……（中略）……除一切蓋障菩薩等諸大菩薩、前後圍繞而演說法。所謂越三時如来之日、加持故、身・語・意平等法門」とあることを指す。
- (3) 初重<sup>レ</sup>現<sup>レ</sup>ず…『大日経疏』巻三（大正三九・六一〇頁中）に「以<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>是衆徳、輪円周備故名漫荼羅也。然以<sup>レ</sup>如来加持故、從<sup>レ</sup>仏菩提自証之徳、現<sup>レ</sup>三八葉中胎藏身、從<sup>レ</sup>金剛密印、現<sup>レ</sup>第一重金剛手等諸内眷属、從<sup>レ</sup>大悲万行、現<sup>レ</sup>第二重摩訶薩埵諸大眷属、從<sup>レ</sup>普門方便、現<sup>レ</sup>第三重一切衆生喜見隨類之身」とあることを指す。

【解説】

資料編の第十二の文は『曼荼羅問答』である。この文は、四重の問答によって構成されている。まず初重の問答では、『大日経』の説会には菩薩のみが列していて声聞はおらず、誰が大日如来の説法を聞き、誰が結集して人間に流伝したのかとの質問に対し、阿難の聞持、文殊の結集と回答している。

それを受けて二重の難では、(初重の難とほぼ同様であるが)『大日経』の中に金剛手や菩薩を列して、阿難などの声聞衆の名を挙げていないにもかかわらず、なぜ阿難の聞持というのかと質問する。この難に対し、経文は略して上首の菩薩のみを挙げたのであり、実には阿難が『大日経』に説かれる「十仏微塵数衆」の中に含まれていると答えている。

この回答を受けて三重の難では、「十仏微塵数衆」とは普賢や執金剛等の眷属であって声聞衆ではないと難ずる。これに対し、胎藏曼荼羅(現図)の中に阿難が画かれているため、大日如来の説会に阿難が列していたと回答している。

第四重の問答では、曼荼羅における阿難の座位を問題としている。如来の説いた三重の曼荼羅は、機根や時に従って現れ加えられたものであり、第二重の釈迦院の阿難は、大日の説法を直接聞持することはできないのではないかと難じている。これに対し、『大日経疏』において「初重より第二重を現じ、第二重より第三重を現ず」といっているのは、これは言説によって表現したためにこの次第となったの

であり、実にはこの三重の曼荼羅は、一時に具わったのであるとする。そして、この曼荼羅に画かれた聖衆は、内は外を、外は内を知る関係であり、融通して平等であるとする。そのため、阿難がこの教えを聞くに至った時、阿難の覚った教えは大菩薩衆と平等であるため、阿難は大日如来の説法を聞くに堪えたる者であると回答している。

これらの諸引用が、本条目で問者（結集者阿難派）・答者（結集者金剛薩埵派）のどちらの見解の証文として用いられていたかといえば、以下のようになる。

問者の見解の証文……⑥⑧⑨⑩⑪⑫

答者の見解の証文……①②④

両方の証文として用いられるもの……⑦

本条目の問答で用いられないもの……③⑤

このように整理すると、『大日経』の結集者を東密では金剛薩埵とし、台密では阿難としているように見受けられる。答者の証文としている④は安然の『教時問答』の引用であるが、これは『正法念経』『阿含経』『集法伝』に数種の阿難が説かれていることを示したものである。答者は、ここに密教経典を結

集した阿難がみられないことから、『大日経』の阿難結集を否定している。

そのような観点よりみれば、本条目の問答で直接用いられていない③『大乘義章』、⑤『仁王般若経疏』も、大乘経典を結集した阿難の名を挙げるものの、密教経典を結集した阿難について言及はないため、答者の見解側の証文とみることができるであろう。

#### 註

- 1 『仁和寺史料』「寺誌編一」二二二頁（吉川弘文館・二〇一三）。
  - 2 『仁和寺史料』「寺誌編一」三二八頁（吉川弘文館・二〇一三）。
  - 3 この「毛利時賢」と「毛利親宗」が如何なる人物であるのかは不明であり、同一人物であるのかも不明である。尚、了賢の事績等については『密教大辞典』や『真言宗全書』解題「著者略伝」（三三九頁上～三四〇頁上）に詳しい。
  - 4 『真言宗全書』解題（二二六頁下～二二九頁下）。
  - 5 『他師破決集』卷二（真全二二・二五八頁上）。
  - 6 『他師破決集』卷五（真全二二・三〇八頁下）。
  - 7 『真言宗全書』解題では、「大覚寺殿」を「性円親王殿」と推測している（二二九頁上）。
- 〈キーワード〉了賢、『他師破決集』、『大日経』結集者